

プロローグ——日記との出会い

二〇〇二年の秋、四月から始まっていた留学生生活も半年が過ぎていた。気温の低下とともにワールドカップの熱狂もようやく収まり、日常を取り戻しつつあった韓国・ソウルで、私はこの日記と出会った。

仁寺洞^{インサドン}に店を構えていたある有名な古本屋が、跡取りがいないため店仕舞いをするのではという噂は前から聞いていたが、ついに、本当に閉店するということで、在庫処分のセール中だとの話を耳にした。普段ではとても手が出ないような本ばかりが並んでいる古本屋ではあったが、もしかしてという淡い期待を抱いてその店に向かった。果たして、これまでは堆く積まれた本に隠れるように奥に座っていたご主人が、店の扉を開けるや否やその姿を見ることができるといふほどに、本の数は少なくなっていた。「全て五〇〇〇ウォン」の紙が書棚に貼ってあり、自分でも買えるぞという期待と同時に、本当にこの店がなくなるのだという寂しさが交錯する、複雑な気分だった。

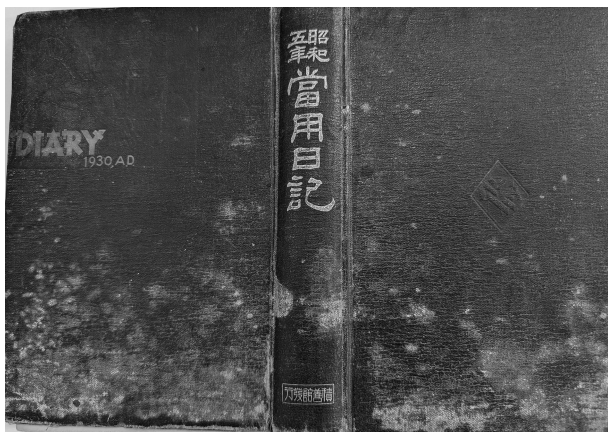
最初に目に止まったのは、和綴じ、いや正確に言えば朝鮮綴じの本であった。手に取るとすぐにご主人から「そっちは売り物じゃないよ」と声がかかり、早々に棚に戻した。流石に欲を出しすぎた。反対側の書棚は洋装本だったので、こっちは間違いない五

〇〇〇ウオンのはずだと思い、少なくなつたとはいえ、まだまだ大量にある本の背表紙に目を走らせた。五〇〇〇ウオンなら買っておくべき本は何冊もあった。持ってきている現金から帰りに食べるつもりのカルグクスとマンドウの値段を差し引いて、購入可能な冊数に合わせて何を買うか考えていた、その時である。

「昭和五年常用日記」という金色の文字が目飛び込んできた。背表紙の書名は漢字で書かれており、しかもかなり古い。積善館発行の文字も見える。積善館といえばかつては、日記帳の発行で博文館と並ぶ有名な出版社だった。胸が高鳴った。あとは日記が書かれているのか、全くの白紙なのか。そして日記が書かれていたとして、それが書名の通り昭和五年、つまり一九三〇年に書かれたものなのか。おそろおそろ日記帳を手に取り、内容を確認した。

西曆一九三〇年、昭和五年은今日로 시작된다.

(西曆一九三〇年、昭和五年は今日から始まる)



古書店で偶然見つけた、「昭和五年當用日記」

最初のページ、つまり一月一日の書き出しはこうだった。万年筆独特の筆跡、漢字混じりの朝鮮語、そして現代とは違うハンゲルの綴り方……間違いない、一九三〇年のものだ。その場でざっと目を通したが、もちろん詳細な内容はすぐに頭の中に入ってこない。ただ、筆者が朝鮮人であること、そして生徒の日記であることはすぐに分かった。授業科目が並んでいる。すごいものを手に取ってしまった、そう思った。

さっきまで自分の財布としていた相談は、一瞬で完全にどこかに行ってしまった。私は一冊の日記帳を手に、奥に座るご主人のところに持って行き、五〇〇〇ウォン札を準備し

た。さっきのように「売り物じゃないよ」と言われないか緊張していたが、大丈夫だった。「この本が必要なのか？」と聞かれたような気がするが、後から追加された記憶かもしれない。定かではない。こうしてこの日記帳は、どこにでもある茶色の紙封筒に包まれ、私のカバンの中に仕舞われた。会計を済ませて古本屋を出る時には、カルグクスもマンドゥも私の頭の中には無くなっていた。早く新村にある下宿に戻って中をじっくりと読みたい。それだけだった。

本稿では、地域名・言語名・民族名として朝鮮を使用するが、光復（日本支配からの解放）後の大韓民国で現在使用されている言語については韓国語と呼ぶ。日記の文章については、原則的に筆者による翻訳文を記載するが、直訳調で訳文を作成したため、ややこなれていない部分がある点をご理解いただきたい。日記中、日本語で書かれている部分については、～で括弧した。また、時代の制約から今日では差別的に捉えられる内容も含まれているが、その点についてもご了解いただきたい。日記の原文を引用した際には「」内に日付を示している。

目次

プロローグ——日記との出会い……………v

第一章 日記をひもとく前に……………1

一日一ページの日記帳／書き綴られた二百六十八日／「朝鮮語」で書かれたことの持つ意味／十四歳から十五歳にかけての記録／日記の中の朝鮮語記述／一九三〇年はどんな年だったか／Y君のこゝと／家族と多彩な親族たち／問題を起こす叔父／仲良しのいとこたち／「近代」を取り入れた一族／京城の構造——町と洞／本書の構成

第二章 学校生活あれこれ……………33

Y君が通った学校／当時の学制——内地と朝鮮の違い／義務教育ではなかった普通学校／高等普通学校進学は激烈な競争／日記に書かれた授業内容／試験にまつわるエトセトラ／あだ名もあった教員たち／学校行事——遠足、演習参観／運動会とスポーツ大会／学者犬トミー、来校す／校内でのいさかい／「爆笑」という新語

第三章 読書とスポーツと…………… 91

足しげく通った三つの図書館／朝鮮語の月刊誌『別乾坤』／愛読した『キング』／日記に書きとめた感想／小説から地理書、問題集、歴史書、『唐手術』まで／冬のスポーツ・スケート／学校対抗戦を応援／バスケットボール大会に熱中

第四章 Y君の夏休み…………… 129

朝の散歩／のめり込まなかった麻雀／「巨人」への並々ならぬ関心／肉食は特別な日に／流行の「モダンパン」／よく食べたマクワウリと桃、格別なリング

第五章 Y君の日常——医療、映画、年中行事…………… 151

日常は市販薬／かかりつけの病院と医師たち／トーキー映画が登場した年／洋画も邦画も鑑賞／陽暦と陰暦のお正月／祖父の葬儀／陰暦で行われた葬礼／数え年と誕生日／お年玉は陰暦で／祝日への思い

長い長いエピソード——戦時期、光復、朝鮮戦争、そしていま…………… 181

京城第一高等普通学校のその後／京城帝国大学附属病院、セブランス病院／昌慶苑から昌慶宮へ／

漢江と橋／＼Ｙ君をめぐる人びと——沈浩燮醫師／親族——洪蘭坡、金元福、洪錫厚、從兄弟たち／＼
Ｙ君のその後——京城帝国大学法文学部に進学／検事から弁護士に転身／朝鮮戦争勃発——ソウル
陥落／北朝鮮のインテリ連行計画／提出された「失郷私民安否探知申告書」

主要参考文献……………

210

あとがき……………

212

第一章 日記をひもとく前に

▼一日一ページの日記帳

今回、一九三〇年の京城（現・ソウル特別市）に私たちを案内してくれるこの日記帳は、同年の一年分である。但し、十二月三十日の記述には翌年の日記帳を買ったことが記されていることから、おそらくそれ以前から、そして一九三一年以降も継続して日記は書かれていたと予想される。しかし、残念ながらその所在は不明である。

この日記帳の前半部分は、一ページに一日の日記が書けるように作られている。各ページには日付が印刷され、天気や気温、来信などを書き込む欄に加えて、ページの大半を占める日記を書くスペースがとられている。日本で出版・印刷された日記帳のため、当然ながら新暦の一月一日から十二月三十一日までとなっている。朝鮮向けに何らかの工夫がなされている形跡はない。

後半部分は、さらに二つのパートに分けられる。備忘録、家庭要録、金銭出納録、住所人名録からなる書き込み式の部分と、一般常識や世界情勢などがまとめて日本語で書かれている現代百科大鑑の二つである。家庭要録は、さらに家庭記念日・戸籍表・近親

名簿・家族保健録・本年度購入書籍目録・番号、期日一覽控に分けられている。

書き込み式の部分が綿密に書かれていたならば、この日記の筆者に関する情報はさらに豊かなものになったであろう。しかし、残念なことに書き込みはあまり多くない。備忘録に朝鮮の著名な画家・書家の姓名及び号が、家庭記念日に家族・親族の誕生日が、個人名ではなく親族呼称とともに羅列的に書かれている。ただし、文字通り誕生日のみが書かれているため、それぞれの年齢は把握できない。そして、本年度購入書籍目録は『別乾坤』の文字が見えるだけ、金銭出納表は一月の五日分と五月の三日分のみ記載がある。戸籍表のページなどでは、英語の練習をした跡が残されており、この書き込み式のページを特に重視していなかったのかもしれない。

▼書き綴られた二百六十八日

続いて、日記の核心部分とも言える、日々の記録に焦点を当ててみよう。

日記の記述は、二月が十四日分と半分程度、三月が七日分と極端に少なくなっているが、それ以外の月は毎月二十日以上確認でき、全体で二百六十八日分の記載がある。時

に一、二行程度の簡単な記載で終わる日もあるが、多くは一ページの半分以上を使って書いており、比較的情報量は多い。しかし、日記の記述者にとっては日記を継続的に続けるためには相応の努力が必要だったようで、二月十四日から中断した日記を一週間ぶりに再開するときには、「昨日まで長い間日記を書かなかったことは大変恥ずかしい。今年十二月末日まで必ず永続する。私は私の良心に盟^マずる。」という決心の言葉から再開している。しかし、その翌日二十三日から二十七日までまたもや日記の記述が途絶えており、ものぐさな私にとつては親近感を覚えずにはいられない。

文章は朝鮮語で書かれており、漢字混じりのハングルが大半を占めている。日本語で書かれた文章は見られないが、書名などの固有名詞の他に、単語レベルで時々日本語が登場する。例えば、〈モッチ〉〈マンヂウ〉〈ロクボク〉〈カタクリ粉〉などである。〈モッチ〉〈マンヂウ〉はそれぞれ餅と饅頭を指す。なお、〈モッチ〉についてはわざわざ〈日本モッチ〉という書き方がされていることから、韓国伝統の餅である「^{トック}トック」とは区別していたことがうかがえる。〈ロクボク〉は体育館などに設置されている肋木のことで、体操の授業の場面で登場することから間違いないであろう。肋木は一九一〇年代前半頃

から日本で普及し始めており、一九三〇年の京城の学校にも肋木が設置されていたことが分かる。

また、十二月の五日間に限って、朝鮮語でも日本語でもなく、英語で日記が書かれている。但し、文法には初歩的な誤りがあり、単語のスペルミスも多々見受けられる。英語を使って試しに書いてみたというレベルだろう。

▼「朝鮮語」で書かれたことの持つ意味

この日記が朝鮮語で書かれているということは、実は重要な意味を持つ。日本の学校教育では、日記を使った指導がしばしば実施されていた。これは植民地期の朝鮮半島の学校でも行われていた。朝鮮人生徒が書き、学校に提出して検印を押された日記については、太田修の研究がある。また、小谷稔も朝鮮人生徒が書いた日記を検討している。その日記は、当然ながら日本語で書かれており、内容も学校生活に關することを主たる対象として検討している。学生ではなく、農村青年の生活を日記の分析から描いた研究としては、板垣竜太による著作もある。この日記は、さすがに朝鮮語で書かれていた。

農村青年の日記同様、この日記が朝鮮語で書かれているということは、学校提出用の日記とは考えられず、実際に検印も確認できない。つまりこの日記は、記述者本人が学校をはじめとする第三者に見せることを前提とせずに書いた日記である可能性が高い。日本の支配に対して批判的なことを直接的には書けないにしても、日記に書かれている記述者の思いや考えは、比較的素直に読んで良いものと考えられる。つまり、一九三〇年当時の京城の様子を朝鮮人の視線から知るために、そして京城で暮らしていた朝鮮人の気持ちを感じ取るには、うってつけの日記ということができる。もちろん、この日記の記述者が、当時の京城に住む朝鮮人を代表しているわけではない。この日記は、あるひとりの朝鮮人の見た一九三〇年の京城を私たちに見せてくれるという意味で、貴重な記録と言える。

▼十四歳から十五歳にかけての記録

さて、この日記の記述者は誰なのか。最初の部分で、朝鮮人であること、生徒であることは指摘したが、より詳しく見ていこう。日記の最後のページに、記述者の名前と住

所が英語で書かれている。姓は全て書かれているが、名は漢字それぞれの先頭のアルファベットのみが書かれていた。本書の筆者である私「原智弘」であれば、「Hara Hara」という具合である。もちろん、漢字の朝鮮語読みをアルファベット表記している。ここで書かれた姓のアルファベット表記をとって、これ以降は日記の記述者のことをY君と呼ぶことにしたい。

次に住所だが、「Keijyo Rakuendo (番地は省略)」と書かれている。漢字にすると、「京城 楽園洞」^{ナゲョンドン}となる。この地名は、朝鮮語の読み方があるにもかかわらず、日本語読みをローマ字表記にして書いていることにも注意を払いたい。ちなみにこの楽園洞は、タプコル(パゴタ)公園のやや北側、骨董品街として有名な仁寺洞と、建物のリモデリングで若者が集まる街へと変貌した益善洞^{イクソンドン}の間に挟まれた地域となる。

日記の本文を見ると、内容の多くは学校に関する事柄で占められており、Y君が生徒であることは明白である。日記中で確認できた教員の個人名と、一九三〇年に在職している教員一覧を照合すると、Y君が京城第一高等普通学校の生徒であったことが判明する。さらに日記の中で他校とのバスケットボール対抗戦の場面が出てくるが、そこに

「一高普」と校名が書かれている。一九三〇年の京城には京城第一高等普通学校と京城第二高等普通学校があり、「一高普」とあれば、間違いなく京城第一高等普通学校を指す。京城第一高等普通学校の後身となる京畿高等学校の百周年記念誌には、植民地期以前からの卒業生名簿が収録されており、それを確認するとY君のイニシャルに適合する名前を見つけることができる。さらに、Y君と同じ学校に通う従兄弟が実名で日記に度々登場するが、その従兄弟の名前も卒業生名簿で確認できる。これ以外にも日記を含め、他の周辺資料を参照していくことで、Y君の実名を確定することができる。生年も一九一五年であることが分かった。つまりこの日記を書いている時、Y君の満年齢は十四歳（九月に十五歳）だった。この年齢で、日記を英語で書こうと努力していたわけである。その心意気やよし、であろう。

実名まで特定できていながら、今回、Y君という匿名のまままで執筆をしているのは、現在までご家族とのコンタクトを取ることができずにいるためである。この事情については、エピローグで述べているので、そこまでお待ちいただきたい。